

Thoreau とマツの木
Maine 州の原生林で Thoreau が見た自然

田中 聡子

はじめに

自然は人間と対等である。Henry David Thoreau (1817-1862) の作品 *The Maine Woods* (1862) の第二章 "Chesuncook" には、人間と対等な自然の存在が書かれている。

Thoreau の作品には様々な自然観が見られる。例えば、Thoreau の代表作 *Walden* (1854) の "Spring" の章では、冬の終わりの朝、太陽に照らされて溶けていく大地の霜の流れが、地球を作った神 "the Maker" として提示される。¹ また、最晩年のエッセイ "Walking" (1862) では、野生 "wildness" のあるところに人間の尊厳を守る自由があると書かれている。² さらに、*Cape Cod* (1865) では、人間が太刀打ちできない大きな力を持った自然への畏怖の念が綴られている。³

これらの作品は、それぞれ違う空間で書かれているため、各作品の印象は様々だ。*Walden* は、町からほんの一マイル離れたウォルデン池のほとりで、2年と2ヶ月という比較的長い期間滞在したという生活者としての Thoreau の目線がある。*Cape Cod* は Thoreau が海岸沿いを歩いて旅した記録だ。逆に "Walking" は、Thoreau の自宅で書かれており、自然と向き合うというより、精神の内面と向き合うといった印象を受ける。

では、原始の自然に粗末なテントと毛布、カヌーだけを持って入ったら、Thoreau はどのように自然を見るのだろうか。"Chesuncook" という作品は、Thoreau がメイン州に住むいとこの George Thatcher と Thatcher が雇ったガイドのインディアン Joe Aitteon と共に、Pebnoscot 川西流にある Chesuncook 湖までカヌーで旅をしたときのエッセイである。この作品には、鬱蒼とした針葉樹の描写や、Thatcher や Joe の旅の目的であるヘラジカ狩りの様子などが記録されており、それらに対する Thoreau の見解が述べられている。ありのままのメインの森やそこに入る人々の描写が内容のほとんどを占めるため、メイン州を紹介する紀行文といった趣だ。しかし、現実の野生 "wilderness" を目の前にしたからこそ見えてくるものがある。Thoreau はこの作品で、人間が自然を見る時に自然にどのような価値があるのかを提示している。商品としての価値をもつ自然、また、命そのものに価値がある自然、それゆえに人間と対等な価値をもつ自然である。

この論では、Thoreau がメインの森に入って見出した自然の価値や自然に対する考え方を明らかにする。

1、消費される自然

Thoreau は原生林の静けさや野性味にあこがれていた。彼は、メインの森で自然に囲まれて昂揚する。しかし、彼はメインの原生自然のなかで日々進む森林破壊の現状を見過ごすわけにはいかなかった。森で出会う木こりたちは、Thoreau に商品としてのマツの木の存在を否応なく突きつける。野生へのあこがれから、マツの木が伐採され続けている現状

に対する危惧へと移る、Thoreau の意識を追ってみる。

旅のはじめ、Thoreau は森の野性味を感じ嬉しくなる。メイン州に入り、バンゴア(Bangor) の街から本格的に森に入ろうとする Thoreau は、街の通りを抜けると「野生のモミ」"the wild fir" (86)や「その他の原始的な常緑樹」"other primitive evergreens" を見て「陽気な気分」"I began to be exhilarated" になる。野外で焚火にあたり体を温めながら野宿することはやりがいがあることだ、と Thoreau が感じていることは"It was worth the while to lie down in a country where you could afford such great fires"(104). という文章からも分かる。

しかし、森の奥へと足をを進めるにつれて、野生の中にいる喜びは薄れる。なぜなら、Thoreau はマツの木が売買の標的にされていることを認識したからだ。メインの森に入る人は少なく、限られた目的の人びとのみだ。それゆえ、Thoreau の関心は、メインの森にわざわざ来る人々に向けられる。その中のマジョリティである木こりたちの行動は Thoreau の関心を引きつける。ある日、日が暮れた後も、Thoreau の一行は川をカヌーで航行した。星の光だけが森を照らす、静まりかえった中、一行は突然岸辺に二人組の木こりが焚火をしながらキャンプをしているのを見つける。岸辺近くをカヌーで通りながら Thoreau は二人の会話を聞いた。"They were just then speaking of a bargain, in which, as I understood, somebody had cleared twenty-five dollars" (100). 彼らは、マツの木の儲けについて話していた。

その後、Thoreau はマツの木が過度に伐採されたことを知る。明るる日、Thoreau はカヌーからマツの林を見つける。それは、「その旅で唯一彼が見ることができたマツの林だった。」"the only collection of pines that I saw on this voyage" (108) しかし、それらはもう成長して高くスラリとしているものの、建材にするには「欠陥品」"defective one" だった。木こりたちは、そのような木には斧で傷をつけたりロープで結び目を作ったりして、一目で分かるようにしていた。"I had come all this distance partly to see where the white-pine, the Eastern stuff of which our houses are built, grew" (144).とあるように、彼の旅の目的の一つは、マツの木をみることだった。にもかかわらず、Thoreau は「ほとんどマツの木を見かけなかった」"I had found it a scarce tree." それだけ、マツの木の伐採が進んでいたのだった。

それゆえ Thoreau は、メインの原生林の将来の姿を案じる。人々が原生林の中に入ってくるのは、町や都会で売るとお金になる資源があるからだ。Thoreau は、資源を求めてやってくる人々の移動を潮にたとえて "Here immigration is a tide"(119) と言い、その潮が「マツの木を一掃してしまったら、引き潮になってしまうだろう」 "[A tide] may ebb when it has swept away the pines" と述べている。 Thoreau はそのようなメイン州の原生自然の現状を目の当たりにし、驚きを覚える。

How far men go for the material of their houses! The inhabitants of the most civilized cities, in all ages, send into far, primitive forests, beyond the bounds of their civilization, where the moose and bear and savage dwell, for their pine-boards for ordinary use. And, on the other hand, the savage soon receives from cities iron arrow-points, hatchets, and guns to point his savageness with (108-9).

Thoreau は、「家をつくる建材のためにこんなに遠くまで人が来ることは！」と驚愕する。街に住む人々が「月並みな使い道のために」"for ordinary use" 遠くにある原始の森に、文明の境界線を超えて人を派遣することに、Thoreau は困惑するのだ。

そして、Thoreau の驚きは怒りに変わる。

This afternoon's experience suggested to me how base or coarse are the motives which commonly carry men into the wilderness. The explorers, and lumberers generally, are all hirelings, paid so much a day for their labor, and as such, they have no more love for wild nature, than wood-sawyers have for forests. Other white men and Indians who come here are for the most part hunters, whose object is to slay as many moose and other wild animals as possible(119-20).

原生林に入る人間の動機が卑劣で下等なものである、と Thoreau は批判する。それは、森に入る白人やインディアンのほとんどがハンターであり、彼らの目的は「できるかぎり沢山のヘラジカや他の野生動物を殺すこと」"to slay as many moose and other wild animals as possible" であるからだ。Thoreau は、生物を殺すだけの自然の利用の仕方を「卑劣」"base"

で「下等」"coarse" であると考えている。なぜ、人々は不必要な殺戮を行うのだろうか。つまり、自分の命を維持するために必要な殺生以上の殺戮である。"The explorers, and lumberers generally, are all hirelings, paid so much a day for their labor, and as such, they have no more love for wild nature, than wood-sawyers have for forests." とある。Thoreau はその理由を、森に入る人々が雇われの存在だからで、原生自然や森に愛情を持っていないからだと考えている。それに対し Thoreau は、森に入る人は以下のようなことに「雇われる」べきだと考える。

But, pray, could not one spend some weeks or years in the solitude of this vast wilderness with other employments than these, - employments perfectly sweet and innocent and ennobling? For one that comes with a pencil to sketch or sing, a thousand come with an axe or rifle (120).

それは「完全に優しく、無垢で、そして気高い職業」"employment perfectly sweet and

innocent and ennobling" のことであり、「斧やライフルを持ってくる」"come with an axe or rifle" ではなく、「鉛筆でスケッチしに、また、詩を作りにくるようなこと」"comes with a pencil to sketch or sing" のために森に来るべきだということだ。それゆえ、Thoreau は "our life should be lived as tenderly and daintily as one would pluck a flower" (120) とあるように、人間の生活は自然に優しいものであるべき、と訴えるのだ。

確かに、自然には資源や食料としての価値があり、Thoreau もそれを認めている。しかし、商品として人間に取引されるだけにしか価値のない自然など Thoreau は賛同しない、ということが分かる。

2、命ある自然

森には命がある。そして Thoreau は、この作品において、自然の命そのものに価値があるとする態度を表している。

Thoreau にとって、他の生物の命を殺してまで食べることは、極力避けたいことだ。森の中の宿に泊まった日の夕食後、他の宿泊客である木こりたちは Thoreau のいとこが獲ったヘラジカの肉を欲しがらる。しかし、Thoreau にとって、それは魅力的なデザートではない。ヘラジカを食べなかった Thoreau は、外に出て、体中の五感を使って「森」をデザートとして味わう。

For my dessert, I helped myself to a large slice of the Chesuncook woods, and took a hearty draught of its waters with all my senses. The woods were as fresh and full of vegetable life as lichen in wet weather, and contained many interesting plants. . . (129).

Thoreau は、生命を殺してデザートとして食べるより、命あるものをそのまま五感を使って味わう方を好むことが分かる。森は新鮮であり、「植物の命でいっぱい」"full of vegetable life" なのだ。

木こりたちやその雇い主、また街に住む都会人たちにとっては、ただの商品としての価値しかないマツの木にも、Thoreau は命を見る。

Strange that so few ever come to the woods to see how the pine lives and grows and spires, lifting its evergreen arms to the light—to see its perfect success, but most are content to behold it in the shape of many broad boards brought to market, and deem *that* its true success! But the pine is no more lumber than man is, and to be made into boards and houses is no more its true and highest use than the truest use of a man is to be cut down and made into manure. There is a higher law affecting our relation to pines as well as to men. A pine cut down, a dead pine, is no more a pine than a dead human carcass is a man. . . . Every creature is better alive

than dead, men and moose and pine-trees, and he who understands it aright will rather preserve its life than destroy it (121).

ほとんどの人が「マツの木が沢山の分厚い板になって市場に運ばれて行くのを見るだけで満足」し "most are content to behold it in the shape of many broad boards brought to market"、それが「マツにとっての本当の成功」"that its true success" だと考えている。しかし Thoreau が考える「マツにとっての完璧な成功」"its perfect success"とは、「どのようにマツの木が生きていて、成長し、そびえ立ち、その常緑の腕を光に差し出しているか」"how the pine lives and grow and spires, lifting its evergreen arms to the light" を見ることなのだ。"Every creature is better alive than dead, men and moose and pine-trees, and he who understands it aright will rather preserve its life than destroy it." この文章には、命が一番大切であり、それは人間に限らずあらゆる生物にあてはまる、という Thoreau の考えが現れている。

3、人間と対等な自然

自然に命があることは、どんなに科学に疎い人が見てもすぐに分かる。動物が冷たくなり動かなければ死んでいる。また、植物が枯れていれば死んでいることになる。自然に命があることを確認するだけでは、Thoreau の自然観は大して他の人と変わりがなくなる。しかし、Thoreau は自然を人間と対等な立場に置いた。そのことに意義があるのだ。この場合「対等」とは、自然を人間と全く同種の生物と考え、自然があたかも家族や親類、隣人のように捉えることである。

では、どのように自然を人間同様の存在として表現したのか。Thoreau は自然に人間同様の肉体を与えることによって、自然を擬人化したと考えられる。

まず Thoreau は自然に衣服を着せることによって自然を擬人化し、肉体を与えた。この作品には、Thoreau が「土地が何にも覆われていない状態」について考えを廻らせている箇所がある。Thoreau は、豊かな自然が衣服をきているかのように表現する。逆に、人間に伐採されてしまった自然には、衣服がはぎ取られてしまったかのような描写をする。

The civilized man not only clears the land permanently to a great extent, and cultivates open fields, but he tames and cultivates to a certain extent the forest itself. By his mere presence, almost, he changes the nature of the trees as no other creature does. The sun and air, and perhaps fire, have been introduced, and grain raised where it stands. It has lost its wild, damp, and shaggy look, the countless fallen and decaying trees are gone, and consequently that thick coat of moss which lived on them is gone too. The earth is comparatively bare and smooth and dry (151).

文明化した人間は 土地を永久に"clears"「一掃」し、"open fields"「開けた土地」を耕す。すると森は "damp"「じめじめした」で "shaggy"「おい茂った」様相を失うのだ。生きていた木々だけではない。役割を終えた "fallen and decaying trees"「倒木や朽ち木」も無くなってしまふ。樹木や土地を覆う枯れ木などが無くなってしまったため、その上に生きていた "thick coat of moss"「分厚い苔の衣」が無くなってしまい、大地が "bare"「裸」になってしまうのだ。このように、人間の活動のため大地がむき出しになっていく様子を、ソローは人間の衣服が剥がされているという擬人化によって表現している。

さらに Thoreau はこう述べている。

The farmer sometimes talks of "brushing up," simply as if bare ground looked better than clothed ground, than that which wears its natural vesture,-as if the wild hedges, which, perhaps, are more to his children than his whole farm beside, were dirt (154).

耕作に励む農民にとっては、"bare ground"「裸の土地」という「体」の方が、"clothed ground"「服を着た土地」や "natural vesture"「天然の衣服」という「衣」よりも見映えする、と書かれている。"[B]are"には「裸の」と「草木のないく土地」、また "vesture"には「衣服」と「立ち木以外の地上の植物((農作物・牧草など))」とあるように、人間の体と衣服の意味と土地を覆う植物のそれぞれの意味を含んでいる。しかし、ソローが "bare ground"と直接比較したのは、衣服や布以外の意味を持たない "clothed" (衣服を着た) 土地である。このことから、ソローが意図的に、土地を人間の体、そして植物を人間の衣服に例えて表現していることが分る。

衣服だけではない。Thoreau はマツの木に感覚さえも与える。

Is it the lumberman then who is the friend and lover of the pine - stands nearest to it and understands its nature best? Is it the tanner who has barked it, or he who has boxed it for turpentine, whom posterity will fable was changed into a pine at last? No! no! it is the poet; he it is who makes the truest use of the pine - who does not fondle it with an axe, nor tickle it with a saw, nor stroke it with a plane; who knows whether its heart is false without cutting into it; who has not bought the stumpage of the township on which it stands (121-2).

「マツの木の本当の友人であり、愛する者は木こりだろうか？マツの木の一番近くに居て、その性質を最もよく理解するのは？」"Is it the lumberman then who is the friend and lover of the pine - stands nearest to it and understands its nature best?" と Thoreau は問う。そして、その質問に対する Thoreau の答えは、まったく林業と関係が無い「詩人」"the poet" だ。詩人はマツの木を「斧で愛撫しない」し "does not fondle it with an axe"、

「のこぎりでくすぐらない」 "nor tickle it with a saw"。また「かんなで撫でもしない」 "nor stroke it with a plane"。ここで Thoreau は、マツの木を肉体として扱っているうえに、その肉体が「愛撫」や「くすぐり」にあたかも反応するほどの感覚をもっているような表現を用いていることが分かる。また Thoreau は、詩人がマツの木に対してすることを続けてこのように述べている。「詩人は切り込みを入れなくても、その木の中心が分かる。」 "who knows whether its heart is false without cutting into it" 木の "heart" は木の中心部のことであるが、もちろん Thoreau が "its heart" 「マツの木のハート」と言ったら、"heart" が持つ一般的な意味の「心」や「感情」が宿るところと考えてもおかしくはないと思われる。

Thoreau はマツの木に人間と同じような肉体を与えただけでなく、感情さえも与えたのかもしれない。それは次の引用からも分かる。

All the pines shudder and heave a sigh when *that* man steps on the forest floor. No, it is the poet, who loves them as his own shadow in the air, and lets them stand. I have been into the lumber yard, and the carpenter's shop, and the tannery, and the lampblack factory, and the turpentine clearing; but when at length I saw the tops of the pines waving and reflecting the light at a distance high over all the rest of the forest, I realized that the former were not the highest use of the pine. It is not their bones or hide or tallow that I love most. It is the living spirit of the tree, not its spirit of turpentine, with which I sympathize, and which heals my cuts. It is as immortal as I am, and perchance will go to as high a heaven, there to tower above me still (122).

マツの木はみな、自分たちを伐採しようとする人間が森に入ると「身震い」"shudder" し、「ため息をつく」 "heave a sigh"。「身震い」や「ため息」は感情なくしてはできないことだ。さらに Thoreau は、マツの木に "spirit" を与える。物質としてのマツの木を本当に有効利用するという事は、当時はマツの木を製材すること、なめし皮にすること、煤にすること、テレピン油にすることなどだった。しかし、Thoreau にとって、マツの木をこのような工業製品にすることは、「最良の使用法ではない」 "not the highest use of the pine"。彼は、物質としてのマツの木ではなく、"spirit"のある生き物として見る。自分が愛し、共感するのは「マツの木の生きている精神」"the living spirit of the tree" である、と Thoreau は高らかに宣言する。

Thoreau は、そのような マツの木の "spirit" に "sympathize" する。この "sympathize" はありきたりに「共感する」や「同情する」といった訳では足りないものが感じられる。なぜなら、Thoreau はマツの木を自分と同様の存在で、対等な立場の生物と位置づけ、「自分と同様に永遠」の存在 "as immortal as I am" とするからだ。それゆえ、Thoreau の言う "sympathize" とは、英英辞書の一冊目に挙げられた "to suffer with" が最も適切であ

るかもしれない。過剰に伐採されているマツの木と「共に苦しむ」からこそ、Thoreau とマツの木は対等なのだ。

4、Thoreau の自然観の特異性——同時代の main stream である Emerson と比較して

Thoreau が自然を人間で比喩したのは有名である。自然の擬人化は彼のあらゆる作品で見られる。そのおかげで、自然を身近に感じる人が増え自然環境保護思想を広めていった、というエコクリティシズムの批評家、Lawrence Buell の指摘も的確である。⁴ しかし、Thoreau が自然を人間として比喩したのは、実は単なる比喩ではないかもしれない。つまり、Thoreau は比喩や冗談でなく、自然を人間と同様のものだと本当に考えていたかもしれないのだ。

それは、Thoreau の時代を代表する思想家であり、Thoreau がもっとも影響を受けた Ralph Waldo Emerson (1803-82) との違いから分かる。自然の事物に "spirit" を関連づけるのは Thoreau の専売特許ではなく、超絶主義の作家に共通である。その代表格である Emerson は、1836 年の『自然論』*Nature* の中で、このように述べている。

Nature is not fixed but fluid. Spirit alters, moulds, makes it. The immobility or bruteness of nature is the absence of spirit; to pure spirit it is fluid, it is volatile, it is obedient. Every spirit builds itself a house, and beyond its house a world, and beyond its world a heaven (*Nature*, 39).

「スピリットが自然を変え、型取りをし、作るのだ。"Spirit alters, moulds, makes it." つまり、人間が "spirit" を持って自然を観察することで、自然はどんな意味をも含有することになる、と書かれている。この Emerson の言葉から、Thoreau を含めて彼を慕う人々は自然に魂をこめて擬人化しただろうし、それが普通だった。

しかし、Thoreau と Emerson の違いは次の引用から分かる。

No man ever prayed heartily without learning something. But when a faithful thinker, resolute to detach every object from personal relations and see it in the light of the holiest thought, shall, at the same time, kindle science with the fire of the holiest affections, then will God go forth anew into the creation (*Nature*, 38).

Emerson は、個人的な物事からすべて切り離して真摯に見つめると、「創造の中に新たな神が出てくる」"then will God go forth anew into the creation." と言う。このことは、自然を観察するときにもあてはまり、Emerson が自然を観察する際、自然を通して神を見ていることになる。一方 Thoreau はというと、彼の作品の中でもっとも自然の有り様を、リアリティをもって描写した作品として有名な *The Maine Woods* では自然を通して神を

見ることはなく、むしろ本論で見てきた通り、自然を一人の人間のような肉体をあたえているのだ。

では、Emerson と Thoreau の自然観で決定的な違いを、二人の日記から引用みよう。Emerson は日記にこのように記している。

In the tranquil landscape, and especially in the distant line of the horizon, man beholds somewhat . . . as beautiful as his own nature.⁵

それに対し、Thoreau は日記にこのように記している。

In the bare and bleached crust of the earth I recognize my friend (*Journal*, 11. 275).

Emerson は自然を通して人間の性質を見るが、Thoreau は友人を見るのだ。この違いは、Thoreau が自然を人間と全く対等な生物として位置づけていることを示唆する。

Thoreau は自他ともに認める「観察者」"observer"であり「詩人」"poet"だった。このことは、Hawthorne が Thoreau と出会ったころの印象からも分かる。⁶ 観察者であるということは、対象物とは一体化しないということだ。Thoreau の自然観は、Emerson が提唱するように「透明な眼球」となって自然と一体になるような自然観では決してない。Thoreau にとっての自然とは、「観察」し、「愛し」たりする相手としての対象とみなすものなのだ。

また Thoreau は、1856 年 12 月 1 日の *Journal* でこのように述べている。

I love and could embrace the shrub oak with its scanty garment of leaves rising above the snow, lowly whispering to me, akin to winter thoughts, and sunsets, and to all virtue. Covert which the hare and the partridge seek, and I too seek. What cousin of mine is the shrub oak? How can any man suffer long? For a sense of want is a prayer, and all prayers are answered. Right as iron, clean as the atmosphere, hardy as virtue, innocent and sweet as a maiden is the shrub oak. In proportion as I know and love it, I am natural and sound as a partridge. I felt a positive yearning toward one bush this afternoon. There was a match found for me at last. I fell in love with a shrub oak.⁷

冬、雪に覆われた森の中で Thoreau は「ヒイラギガシ」"shrub oak"を見た。Thoreau は「愛情」を持って「そのヒイラギガシを抱きしめることが出来た」"I love and could embrace the shrub oak."と言う。また、「ヒイラギガシとは、一体どんないつこなのだ?」「What cousin of mine is the shrub oak?」と言い、自分と血がつながった親類のように扱うのだ。そして、ヒイラギガシの「善良」"virtue"で「無垢」"innocence"、「やさしい」

"sweet" 「乙女」"maiden" な様子に、Thoreau は「とうとう私に合った妻が見つかった。私はヒイラギガシと恋に落ちた。」"There was a match found for me at last. I fell in love with a shrub oak." と言う。Thoreau はマツの木に対して「愛する」であったり「友人」であったり「共感をもつ」という言葉を多用している。Thoreau が自然に人格を与えているということを示しているといってもおかしくはないだろう。彼は日記に次のような言葉を残している。「こんな地球の事柄にほとんど人格のようなものを信じている。」"believe almost in the personality of such planetary matter"⁸

おわりに

自然を人と対等に見なすという考え方は、当時受け入れられただろうか。そうは簡単に理解されなかったようだ。"Chesuncook"が最初に世に出たのは、1853年12月14日コンコード・ライシーアムでの講演としてであった。その時のタイトルは「ムースヘッド湖への旅」"Journey to Moose Head Lake"。⁹その後、1858年の『アトランティック・マンスリー』誌7月号に、トップ記事として掲載された。しかし、同誌編集者の James Russell Lowell, (1819-91) は、Thoreau がマツの木の魂を自分の魂同様に永遠な物だと表した文章を Thoreau に断りもなく削除してしまった。¹⁰ "It is as immortal as I am, and perchance will go to as high a heaven, there to tower above me still" (122). の箇所である。Lowell が Thoreau の死後に書いたエッセイ("Thoreau," 1865) には、Thoreau の自然に対する親密度がセンチメンタルで現実離れていると書かれている。¹¹ また、Thoreau 研究で有名な Walter Harding は、Thoreau の伝記に「Lowell は、その削除した文章が彼 [Lowell] の読者には "pantheistic" すぎると考えたのは明らかである」と述べている。¹² さらに、前出の Buell は、現代前の時代に人間以外の存在を、ナレーターを含めた人間以上の存在として主役にするのは異例のことであり、と指摘する。¹³ 自然と人間を対等に扱うということは、Thoreau の時代では受け入れがたかったことだと分かる。

Thoreau の自然の擬人化は単なるメタファーではない。彼は人々に自然を身近なものとして親しんでもらうために自然を擬人化したのでもないし、ただ単に自然が好きだったから「木を切ってはいけない」「森を守らなくてはいけない」と言ったのではない。確かに、人間が自然に見出す価値の中で最も多いのは「資源としての価値」だ。しかし、Thoreau は、自然の価値を人間の消費の対象にするだけではとどまらず、自然の命そのものに価値を見出した。ここまでは、誰でもできることだと思われるが、Thoreau は、さらに自然に肉体と感覚、さらに人格とも言えるような感情を与え、自然が持つ価値を自分自身と対等なものにした。Thoreau にとって自然は、「友人」であり「いとこ」であり「連れ合い」なのだ。そのように考えている相手に対して、ナタやノコギリを叩き付けることができるだろうか。Thoreau には、それはできないだろう。自然を人間同様の命ある対等な存在と

見なす。この Thoreau 独特の自然観ゆえに Thoreau は自然の保護を訴えたと考えられる。

自然を人間と対等にする。人間と対等だからこそ、その命をたやすく奪ってはいけないということ。この Thoreau の考えは、現代の自然環境保護思想の中核となす「持続可能性」"Sustainability" の維持とは違う。「持続可能性」とは、生態系のバランスを保つために、人間が与える自然へのダメージを最小限にしようとするものだ。しかし、「持続可能性」の考え方では、自然から資源を摂取しすぎると結局は人間が困る、という人間中心の思考が見え隠れする。

Thoreau が自然を人間と対等の存在にし、その命を守ろうとしたことは、決して人間中心の考えからではない。"Chesuncook"に見られる Thoreau の自然観は、ともするとナイーブに聞こえ、人間の文明的な生活、もしくは人間の存在そのものさえも否定してしまうように受け取られるかもしれない。しかし、Thoreau は決して人間の存在を否定はしていない。そこに矛盾を感じるのは必然だ。だからこそ Thoreau は他の作品で「必要最低限」"necessary"の資源で暮らすことや (*Walden*, "Economy") 人間の欲を意味する「獣性」"wildness" (*Walden*, "Higher Laws") の抑制についてたくさんの頁を費やして語ったのかもしれない。Thoreau がこのような自然観を持つに至った経緯は、彼の日記等を丹念に調べていくことが必要であると思われる。また、文明生活と自然の保護の間で板挟みになった Thoreau について研究することが、今後の課題である。

本稿における "Chesuncook." *The Maine Woods* からの引用は、すべて Henry David Thoreau. *The Writings of Henry David Thoreau: The Maine Woods*, Princeton: Princeton University Press, 1972. により、本文中の括弧内には頁数のみを記すこととする。

註

¹ Thoreau, Henry David. *The Writings of Henry David Thoreau: Walden*. Princeton: Princeton University Press, 2004. p.308.

² Thoreau, Henry David. "Walking," *Excursions and Poems*. Boston: Houghton Mifflin, 1906. p.217.

³ Thoreau, Henry David. *The Writings of Henry David Thoreau: Cape Cod*. Princeton: Princeton University Press, 1988. p.9.

⁴ Buell, Lawrence. *The Environmental Imagination*. Cambridge: Harvard University Press, 1995. p.211.

⁵ Emerson, Ralph Waldo. *Nature, Addresses, and Lectures*. Ed. Robert E. Spiller and Alfred R. Ferguson. Cambridge, Eng.: Cambridge University Press, 1971. p.10.

⁶ Hawthorne, Nathaniel. *American Notebooks, The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*, vol. VIII. Ed. Claude M. Simpson. Columbus: Ohio State University Press, 1972. p.354. "Mr. Thorow is a keen and delicate observer of nature --- a genuine observer, which, I suspect, is almost as rare a character as even an original poet; and Nature, in return for his love, seems to adopt him as her especial child, and shows him secrets which few others are allowed to witness." (September 1st. 1842)

⁷ Thoreau, Henry David. *The Journal of Henry David Thoreau: in Fourteen Volumes*

Bound as Two (Volume VIII-XIV). Ed. Bradford Torrey and Francis H. Allen. New York: Dover Publications, 1962. p.1089.

⁸ Thoreau. *Journal*. Vol. 9, pp.44-45

⁹ 小野和人『ソローとライシーアム——アメリカ・ルネサンス期の講演文化』開文社、2000年、p.65

¹⁰ Harding, Walter. *The Days of Henry Thoreau*. Princeton: Princeton University Press, 1992. p.393

¹¹ Lowell, James Russell. "Thoreau." *The Recognition of Henry David Thoreau*. Ed. Wendel Glick. Ann Arbor: The University of Michigan Press, 1969. pp.42-43

¹² Harding. *The Days of Henry Thoreau*. p.394. "The expurgated sentence Lowell had apparently thought too pantheistic for his readers."

¹³ Lawrence. *The Environmental Imagination*. p.209

参考資料

Buell, Lawrence. *The Environmental Imagination*. Cambridge: Harvard University Press, 1995.

Emerson, Ralph Waldo. *Nature, Addresses, and Lectures*. Ed. Robert E. Spiller and Alfred R. Ferguson. Cambridge, Eng.: Cambridge University Press, 1971.

Harding, Walter. *The Days of Henry Thoreau*. Princeton: Princeton University Press, 1992.

Hawthorne, Nathaniel. *American Notebook, The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*, vol. VIII. Ed. Claude M. Simpson. Columbus: Ohio State University Press, 1972.

Lowell, James Russell. "Thoreau." *The Recognition of Henry David Thoreau*. Ed. Wendel Glick. Ann Arbor: The University of Michigan Press, 1969.

Thoreau, Henry David. *The Journal of Henry David Thoreau: in Fourteen Volumes Bound as Two (Volume VIII-XIV)*. Ed. Bradford Torrey and Francis H. Allen. New York: Dover Publications, 1962.

---, "Walking," *Excursions and Poems*. Boston: Houghton Mifflin, 1906.

---, *The Writings of Henry David Thoreau: Walden*, Princeton: Princeton University Press, 2004.

---, *The Writings of Henry David Thoreau: Cape Cod*, Princeton: Princeton University Press, 1988.

小野和人『ソローとライシーアム——アメリカ・ルネサンス期の講演文化』開文社、2000年